

Title	研究者映像データベースを用いたコーディネート手法の実践と課題(高等教育機関と産業界との連携による人材育成(2),一般講演,第22回年次学術大会)
Author(s)	西脇, 有里奈; 柴田, 勇三; 西尾, 直樹; 森田, 昌樹
Citation	年次学術大会講演要旨集, 22: 748-751
Issue Date	2007-10-27
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/7384
Rights	本著作物は研究・技術計画学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Science Policy and Research Management.
Description	一般講演要旨

2 F O 1

研究者映像データベースを用いたコーディネート手法の実践と課題

○西脇有里奈、柴田有三、西尾直樹、森田昌樹（NPO法人KGC）

0. はじめに

NPO法人KGCが運営している研究者映像データベース Researcher Zukan は、研究者の世界的な異分野融合の促進を目的としたプロジェクトである。今回、このプロジェクトを通じて、人材育成にも効果があることがわかった。ゆえに、今学会においてはその詳細を報告する。

1. Researcher Zukan の目的

NPO法人KGCが運営している研究者映像データベース Researcher Zukan は、昨年の12月から活動を始めたものである。これは世界中のあらゆる分野のあらゆる研究機関の若手研究者に対してのインタビュー映像を配信し、研究者同士の世界的な異分野融合の促進を図るプロジェクトである。新しい研究を生み出すためには自由な発想が必要であり、既存の常識がその妨げとなることが多々ある。しかしながら、そのような弊害を Researcher Zukan がコーディネートする研究者同士の世界的な異分野融合によってなくすことで、研究者は、既存の常識にとらわれない自由な発想をもとに新しい研究を生み出すことが可能となる。

2. Researcher Zukan の特徴

2-1. 研究者映像データベース

Researcher Zukan は、インターネットのウェブサイトというツールを用いて、全世界に向けて研究者のインタビュー映像を配信している。インタビュー映像を配信している理由は、映像はテキストよりも偶発性を誘発させるからである。研究は、過去の世界的に有名な研究者たちがそうであるように、何らかの事をきっかけにした偶然によるインスピレーションが大事である。そのようなインスピレーションが Researcher Zukan のウェブサイトを視聴することで起きやすくするために、われわれはテキストではなく映像でインタビュー配信をおこなっている。

また、テキストベースのウェブサイトの場合、相互リンクという方法で偶発性を誘発することは可能である。しかしながら、Researcher Zukan は出演者と視聴者の異分野交流及び融合を目的としているので、テキストではなく、映像を配信したほうが、彼らが互いに連絡を取りやすくなる。

2-2. 使用言語

使用言語は英語である。9月までは日本語でインタビューを行っていたが、プロジェクトの国際化を考えたときに、最も多くの人に使われている英語を採用することに決めた。

2-3. インタビュアー

今まではKGCスタッフがひとりでインタビューをおこなっていたが、活動範囲や更新頻度に限界があった。しかし、10月からはインタビュアーを複数にすることで、全世界にインタビュアーを点在させることが可能となった。また、複数のインタビュアーのスキルを標準化するために、インタビューマニュアルを作成した。

2-4. 4つの質問

インタビューは、全部で4つの質問に沿う形で進められている。
4つの質問とは以下の通りである。

- 1) 今まで取り組んできた研究テーマ
- 2) 今まで取り組んできた研究を通じて提供できるもの（知識・技術・装置・人脈など）
- 3) これから取り組みたい研究テーマ
- 4) これから取り組みたい研究の実現のために提供してほしいもの（知識・技術・装置・人脈など）

研究者は、普段、学会などで同じ専門分野の研究者に対して「今まで取り組んできた研究テーマ」を話す機会はある。しかしながら、異分野の研究者に向けて話す機会は、ほとんどない。この4つの質問の最大の特徴は、「今まで取り組んできた研究テーマ」のほかに「今まで取り組んできた研究を通じて提供できるもの」「これから取り組みたい研究テーマ」「これから取り組みたい研究の実現のために提供してほしいもの」を含めることで、より異分野との接点が見つかりやすくなる。ゆえに、今までほとんど交流がなかった異分野の研究者同士を結び付ける役割を果たすのである。

また、4つの質問を通じて「今まで取り組んできた研究を通じて提供できるもの」と「これから取り組みたい研究の実現のために提供してほしいもの」とを合わせて「これから取り組みたい研究テーマ」が実現するのかどうかという確認できる機会が得られることも特徴である。

2-5. 異分野融合までの支援

Researcher Zukan 事務局は、ただインタビュー映像を配信するだけではなく、研究者の異分野融合に関するコミュニケーションの支援もおこなっている。

まず、視聴者が連絡をとりたい出演者がいた場合にコンタクトフォームから必要事項を記入し、Researcher Zukan の事務局まで連絡をする。そして、Researcher Zukan 事務局が出演者に連絡を取る。そして、出演者が視聴者とやり取りを希望する場合は、トラブルを防ぐために事務局のメールアドレスをccに入れながら出演者と連絡を取り合ってもらおう。そして視聴者と研究者がSkypeやメールやチャット、または対面を通じて異分野同士の情報交換をし、のちにその様子をResearcher Zukan の事務局に報告していただいている。

3. Researcher Zukan の人材育成

Researcher Zukan の本来の目的は、世界的な異分野融合の促進である。

しかしながら、活動を通じて人材育成という効果があることがわかった。人材育成の主な対象者は、20代から40代の若手研究者である。以下は若手研究者を三者の立場で分けている。

3-1. 出演者の人材育成

まず、インタビューをおこなう前にインタビュアーとの念入りな打ち合わせがおこなわれる。これにより、研究者は異分野の研究者に自分の研究内容を伝える技術が身に付く。

また、2. Researcher Zukan の特徴で述べたようにインタビューは4つの質問に沿って行われる。4つの質問により、これまで学会などで「今まで取り組んできた研究」にだけ発表する機会があった研究者が「今まで取り組んできた研究を通じて提供できるものは何か」「これからどのような研究をしたいのか」「これから取り組みたい研究の実現のために必要なものは何か」ということについて考えることで、自分の研究についてより掘り下げて考えたり伝えたりすることができるようになる。

日本人の研究者に日本語でインタビューをおこなっていたときには「英語で自分の研究を話すのは苦手だ」という声が多数寄せられた。しかしながら、この Researcher Zukan を通じて、日本語ではなく英語で話すことで、世界中のより多くの人に自分の研究について知ってもらうことができる。英語で話すことにはそのようなメリットがあるので、実際に英語が苦手な研究者にとっては、Researcher Zukan は英語で自分の研究を話す良いトレーニングの機会になる。

また、配信を通じて、出演者はさまざまな分野の人たちからのフィードバックを得ることで、さまざまな研究の視点を持つことができる。それによって、自分の研究をより深堀することができる。

3-2. インタビュアーの育成

インタビュアーもインタビュー同様主に若手研究者である。実際に過去にインタビューを受けた研究者もインタビュアーとして協力していただいている。インタビュアーはインタビューの実践を通じて、さまざまな技術が身に付く。

まず、インタビューをおこなう前の出演者との念入りな打ち合わせで、インタビュアーは異分野の研究者の話を引き出す技術が身に付く。次に、インタビューをおこなうことで異分野の研究者の話を理解しようとする技術が身に付く。

また、若手研究者だけではなく、学生のインタビュアーもいる。

3-3. 視聴者の育成

主な視聴者は、現時点では、日本の若手研究者である。しかしながら、これからプロジェクトの発展に伴い、世界中のあらゆる世代の視聴者を獲得する必要がある。

Researcher Zukan は、さまざまな分野の研究者がインタビューに答えているので、学生には進路決定の手助けとなることができる。また、退職した高齢者の方たちにとっては、生涯学習について考える際の手助けとなることができる。このような位置づけで Researcher Zukan が発展を遂げれば、異分野の研究に精通した将来的な研究者予備軍やサポーターを Researcher Zukan によって生み出すことができる。

4. 今後の課題とその解決方法

4-1. 今後の課題

Researcher Zukan の人材育成における課題は、今後、インタビュアーが世界に点在したときにどのようにひとりひとりのクオリティーを保つかである。

4-2. 解決方法

課題に対する解決方法としては、オンラインとオフラインとで2つの手段がある。

まず、オンラインの場合であるが、インターネット上でインタビューの内容について、インタビュアー同士でフィードバックしあう仕組みをつくる方法が有効である。なぜなら、実際にインタビューをおこなっている者同士がフィードバックしあうことで、Researcher Zukan の事務局が直接育成する手間を省くことができるとともに、インタビュアーの自発性を高めるからである。

次にオフラインの場合であるが、実際にはオンラインと同じでインタビュアー同士がフィードバックしあう仕組みを作る方法が有効である。実際にアメリカの大学でインタビューの活動をクラブ活動にしようという動きもある。